《わがまちのお宝　川棚町》

わが町に影響を与えた戦時中の歴史を振り返る

川棚町企画財政課

はじめに

川棚町は、南北に長い長崎県のほぼ中央に位置し、東は東彼杵町と佐賀県嬉野市、北は波佐見町、西は佐世保市と接し、南は大村湾に面しています。

川　棚　町　遠　景

面積は37.25㎢で、東に海抜608ｍの峻嶮な虚空蔵山（こくうぞうざん）がそびえています。その特徴的な山容から「九州のマッターホルン」とも言われ、町のシンボルとして町民から親しまれています。また、ここを源とする石木川は川棚川と合流し、まちの中央部を貫流して大村湾にそそいでいます。

川棚川の上流は、両岸にほ場整備された水田が開け、下流の両岸は市街地を形成して町の中心地となっています。この川棚川下流右岸には、行政、教育・文化、医療などの機関が集積し、左岸の平坦部には商店街や工場、港湾が整備されています。また、下流の背後地にあたる丘陵地帯には城山公園があるほか、その周辺一帯は住宅地が形成されています。

国民宿舎くじゃく荘と長崎国体でホッケー競技会場となる川棚大崎自然公園交流広場

西部地域には、大村湾に大きく突き出た大崎半島があり、一帯が県立自然公園に指定されています。ここでは、小串湾の絶景がみられるとともに、豊かな緑や美しい景観を活かしたスポーツ・レクリエーション施設などが整備されており、観光拠点となっています。

日本一をはじめ優秀な成績を収めた本町勢

特産品は、平成24年10月に開催された全国和牛能力共進会で見事日本一の栄誉に輝いた「長崎和牛」をはじめ、糖度が高く甘くておいしい「小串トマト」やハウスミカン、

グリーンアスパラガス、また、柔らかい身に定評がある「川棚なまこ」が有名です。

歴　史

肥前風土記のなかで、はるか昔「川岸之村」と呼ばれていたと記されている本町は、1934年（昭和９年）に町制を施行し、川棚町としての歩みを始めました。

製糸組合東栄社など産業振興も軌道に乗りつつあったなか、第二次世界大戦中であった1942年（昭和17年）に百津（ももづ）に海軍工廠ができたのをはじめ、軍関係の施設が町内のいたるところにできました。

この時代が今日の本町の成り立ちに与えた影響は少なくありません。

これから戦時中の歴史を振り返り、往時の苦難に思いを寄せ、今日わたしたちが享受している平和な社会の尊さを改めて考えるきっかけとなればと思います。

川棚町内の戦時主要遺跡

戦時中、長崎県内には長崎市に造船所、佐世保市に軍港と海兵団と工廠、大村市に海軍航空隊と航空廠と陸軍の連隊などがありました。

川棚町には魚雷発射試験場・海軍工廠・魚雷艇訓練所など旧日本海軍関係の重要施設が開設され、関係の人員も配置されて、太平洋戦争の末期には町内の総人口は約３万人とか４万人とか、或いは５万人だったともいわれています。

戦時中は、要塞地帯として厳重に情報統制されていましたが、敗戦後に旧日本軍関係の書類は焼却廃棄、有用な施設設備の大部分は戦勝国へ賠償として接収され、残ったその他の設備も民間転用や盗み、壊し、撤去・改修などにより、その多くはわからなくなってしまいました。

１．魚雷発射試験場跡【所在地：三越郷（みつごえ）の「片島」】　～各種魚雷の実動試験をしました～

片島はその名称のように、南側が断崖絶壁で島を半分に割ったような形の離れ島でしたが、1942年からの増設工事に伴い、途中の海峡が埋め立てられて陸続きになりました。

片　島　全　景

（１）魚雷発射試験場

佐世保海軍工廠や三菱長崎製作所で製造した魚雷（魚形水雷）の発射試験をするために、1918年（大正

７年)、片島の西側に開設されました。

コンクリート造りの発射場、レンガ積みの発射場塔、クレーンの基礎台、５連アーチの桟橋、運搬用の複線のレール跡などが残っています。

施設	場所	開設時期
魚雷発射試験場	三越郷	1918（大正７年）
川棚海軍工廠 疎開工場	百津郷 石木郷他	1942（昭和17年） 1944（昭和19年）
魚雷艇訓練所 特攻隊員訓練	小串郷 新谷（しんがえ）郷	1944（昭和19年） 同上
海軍共済病院	下組（しもぐみ）郷	1944（昭和19年）

（２）魚雷観測所

片島の山頂（標高54㍍）に1918年（大正７年）設置、その後鉄筋コンクリートに改造。

発射場から発射された魚雷の進行状況を観測し、記録しました。発射試験に合格した魚雷は船で佐世保鎮守府に送りました。

（３）新観測所

川棚海軍工廠の開設により、1943年（昭和18年)、片島の南西側の海中に増設されました。鉄筋コンクリート２階建て。片島との間に木製の橋が架かっていましたが、老朽破損し、橋脚基礎のコンクリート部が海中に残っています。

（４）試験場本部の建物

片島にある本部建物

大きい建物で精密工場・調整工場とも呼びました。

１階部は石積み、２階部はセメントレンガ積み、屋根部分は無くなっています。内部は東西２つに区切られ、西側部屋の床の半分はタイル張り、東側部屋は機械類を設置したらしく、コンクリート土台や穴が残っています。各種の機材や魚雷などが収納され、試験場の本部として使用されました。なお地元住民には資材倉庫と知らされていたそうです。

（５）試験水槽など

本部建物の南側にプールのような水槽があります。魚雷の水槽試験などに使用されたのでしょうか。内容積は東西25m・南北８m・深さ1.5mあります。

（６）魚雷（魚形水雷）

魚雷（魚形水雷）は駆逐艦用、潜水艦用、魚雷艇用、航空機用など多くの種類があります。

川棚海軍工廠では航空機用を製作しました。91式航空魚雷改３型は、爆薬量240kg、速力42㌔（時速約78㎞)、有効進行距離2,000m、直径45㎝、全重量852kg、全長527㎝。

雷撃機に取り付けられた航空魚雷

なお、91式とは日本紀元2591年（西暦1931年、昭和６年）に制定された形式の記号。有名な零式戦闘機＝ゼロ戦は日

本紀元2600年（西暦1940年、昭和15年）に制定された記号です。

（7）トンネル（防空壕）など

片島を南北に貫通するトンネルが東部と西部に掘られました。東部トンネルは長さ約150m高さ3.5m内幅4.5m。東部トンネルの北口枠には鉱滓（こうさい）（溶鉱炉の燃え滓（かす））レンガを使用してあるので、開設は太平洋戦争開戦後、川棚海軍工廠開設と同じ頃でしょうか。奥行き9.7m部分で天井部分が崩落しています。

西部トンネルの北口は、入口から数m部分で崩れ落ちています。内部は粗掘り状態のままで、長さは約140m、片島の南側まで貫通しています。川棚海軍工廠で製作した航空魚雷を船で運んで来て、発射試験をするまでの間、これらのトンネルの中に収納したとの記録があります。

また、東部トンネルの北口の北西、ヤブ林の中に鳥居が建ててあり、鳥居額は無く、階段があります。地元の人の話では片島神社（淀姫様）があったのが、1913年（大正２年）、三越地区に遷されたといわれます。

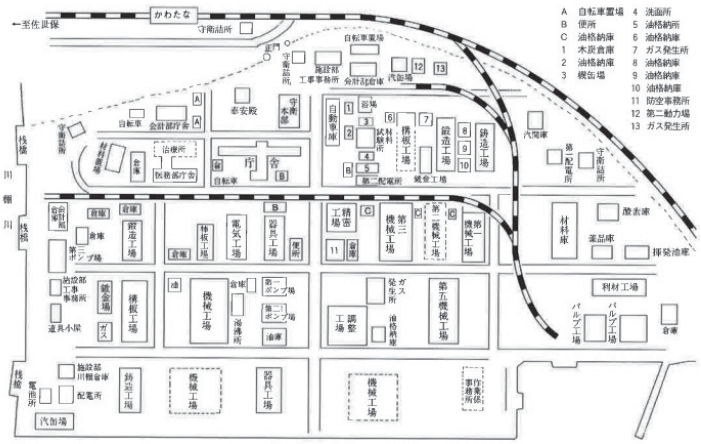
（8）変向魚雷観測所跡

大崎半島の南西部の山頂131.5mに、太平洋戦争末期、開設されました。南方海面と西方海面の眺望が特に良く、変向魚雷の進行を観測するのに適した場所です。

片島の魚雷発射試験場から南向きに発射した魚雷の進路を、大崎半島沖で西向きに変え、その進行状況を観測するために作られました。

当時は側壁・天井などが整った鉄筋コンクリート建物で屋上に鉄塔が建っていました。敗戦後、クズ鉄ブームの鉄筋盗み掘りにより破壊されたようで、現在は床面の基礎コンクリート部分だけが残っています。

太平洋戦争の開戦時、ニイタカヤマノボレの暗号電報を発信したといわれる針尾島の３本の無線塔が、ここからはよく見えます。



川棚海軍工廠工場配置図

２．川棚海軍工廠跡　～航空魚雷などを製造しました～

1940年夏、下百津塩浜の一帯を数人が調査

1941年初期、城山東の丘に調査事務所が建つ

同年12月08日　太平洋戦争開戦

同年12月21日　地元の住民に移転命令
1942年01月15日　佐世保海軍工廠の川棚分工廠として起工式。下百津地区の約20㌶
同年10月15日　分工廠が開庁創業、91式航空魚雷（航空機搭載用の魚形水雷）を製造した。
1943年05月01日　独立して川棚海軍工廠となり、航空魚雷工場としては日本一といわれた。

工廠施設は下百津一帯に建てられ、その鋸歯状屋根と高い煙突群は工廠のシンボルとなりました。

1944年（昭和19年）春頃、工廠施設の疎開移転を開始。小串郷・新谷郷に魚雷艇訓練所が開設されて、関連施設が拡充されました。海軍工廠と訓練所及び片島の魚雷発射試験場関係を合わせた、官舎・宿舎・住宅・倉庫・砲台・資材置場など軍用地の総面積は、川棚町の耕地総面積の約３分の１（約400㌶）になりました。

1945年８月15日、敗戦により閉庁。戦後は現･コバレントマテリアル（東海炉材→東芝セラミック）や五島鉱山、日本ハムやディーシー、自動車学校や鉄工所等、多数の企業が進出しました。

西正門の南側に塩田跡記念石碑、北側に海軍工廠説明板が建ててあります。

◆工廠関連残存戦時遺跡

（１）現在の本部事務所

壁の芯はレンガ建てだそうですが、現在は内外共に改装されていて、外観ではレンガ建てとは分かりません。戦時中は第二配電所棟でした。

鉱滓レンガ倉庫

（２）煉瓦の倉庫群

赤レンガ建てが２棟、鉱滓（こうさい）レンガ建てが大小各１棟あります。

（３）防空壕

①警備員用の防空壕

海軍工廠の守衛（警備員）が、敵アメリカ軍飛行機の空襲のとき、この中に避難して、周囲を警備しました。ここの他にも数か所にありましたが、現在はここの１か所だけが残っています。

警備員用防空壕

②半地下型防空壕

半分程度を地中に埋設する型式で、内部はかなりの広さがあり、空襲警報・警戒警報が発令されると、この中に避難しました。

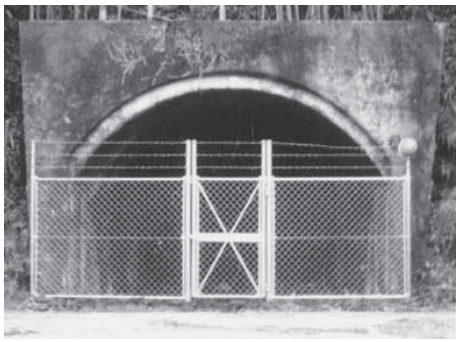
（4）官舎・工員住宅・寄宿舎

木造の平屋建てと２階建てが城山・新百津・若草・旭が丘・山手・琴見が丘の各地区に残っています。

大型の長さ約100m、２階建て木造寄宿舎が白石郷の馬場谷と尾山、中組郷の清水ノ平、上組郷の川良田原にありましたが、移転したり取り壊されたりして、現在は残っているのはありません。

３．川棚海軍工廠の疎開工場跡【所在地：石木郷地域】

（1）トンネル工場跡　～航空魚雷の部品を作りました～



トンネル工場入口

戦局が厳しくなり、アメリカ軍飛行機による空襲のおそれが大きくなったので、下百津工場の施設を1944年春ごろから、分散疎開することになりました。風南山の北麓、石木川の南側沿いにトンネルが残っています。旧道路面から水平南向きに掘り進みました。

トンネルの数は20本以上ありましたが、現認数は17本。高さ3.2m幅4.0m奥行の最長は47.0m全面コンクリート張り、最奥部で相互に連結してあります。ここに旋盤やボール盤などの工作機械を据え付け、８時間労働の３交代24時間フル操業で、航空魚雷の部品を製造しました。

専門の工員たちは軍隊に徴兵されて減少し、工員養成所の養成工や女子挺身隊、学徒動員された中学生・女学生・国民学校の高等科生など多数が働きました。西隣の川良田原全面に大型２階建ての女性用寄宿舎など10棟以上がありました。

（2）半耐爆型工場跡

半地下式ともいいますが、実際は地面上に構築してあります。

内幅7.7m、奥行（長さ）は約100m、高さ3.75mのコンクリート側壁の上に、木枠トタン葺きの３角屋根を載せた形式。大型機械の操業や各種資材などを収納しました。

石木郷の浦川内と鶴堂、岩屋郷の川原地区に計８カ所のコンクリート側壁が残っています。

猪乗川内郷にも半耐爆型工場が建てられましたが、現在は残っていません。

（3）疎開工廠総務部用の防空壕　～規模が大きく、作りが頑丈です～

八幡山の南麓・上石木の池田氏宅地に疎開工廠の総務部がありました。その裏山に専用の防空壕トンネルがあり、主坑道長149.2m、総延長221.4m、特に広い部分は幅5.0m・高さ3.5m・長さ41.6m。多くの部屋に仕切られて、会議室・事務室などがありました。防空壕の出入口（兼換気口）は東部・中部・西部・その他に設けてあります。

御真影（昭和天皇と皇后両陛下の御写真）を奉納する奉安殿も特別に設けてありました。

通常は防空壕の近くの疎開庁舎で執務し、敵飛行機の警戒警報や空襲警報が発令されると、防空壕内に避難して執務しました。

（４）浦川内の防空壕

浦川内谷の両側に半耐爆型工場があり、谷の西側の風南山東麓に防空壕が掘られました。壕の平均高さ２ｍ平均幅２ｍ、東西に４本で最大長さが45m、南北に３本で最大長さが112m、総延長は344m、川棚町内の現存では最も長い防空壕です。

４．川棚魚雷艇訓練所跡【所在地：新谷郷と小串郷（本部は新谷郷小字塩浜）】
～水上・水中の特攻隊員を養成しました～

（１）川棚魚雷艇訓練所（特攻戦隊突撃隊）

1944年（昭和19年）４月１日、横須賀水雷学校の分校として移転し、臨時魚雷艇訓練所が小串郷・新谷郷一帯に開設されました。殉国の碑の広場の北側に訓練所の本部があり、ここをほぼ中心として、西側の深浦から東側の惣津地区・現小串郷駅東部及び北側の山の手一帯に訓練所関連の施設がありました。

震洋艇乗組員の訓練期間は約１～２カ月、訓練生の数は平均で3,000人、多い時は5,000人以上も在所しました。ここで訓練を受けて出陣した総人数は数万人といわれます。

（２）特攻殉国の碑　碑文（本文は縦書き）

特攻殉国の碑

『昭和十九年日々悪化する太平洋戦争の戦局を挽回するため日本海軍は臨時魚雷艇訓練所を横須賀からこの地長崎県川棚町小串郷・新谷郷に移し魚雷艇隊の訓練を行った。魚雷艇は魚雷攻撃を主とする高速艇で、ペリリュー島の攻撃硫黄島最後の撤収作戦など太平洋印度洋において活躍した。更にこの訓練所は急迫した戦局に処して全国から自ら志願して集まった数万の若人を訓練して震洋特別攻撃隊伏竜特別攻撃隊を編成し、また回天蛟竜などの特攻隊員の練成を行った。震洋特別攻撃隊は爆薬を装着して敵艦に体当りする木造の小型高速艇で七千隻が西太平洋全域に配備され比国コレヒドール島沖で米国艦船四隻を撃破したほか沖縄でも最も困難な状況のもとに敵の厳重なる警戒を突破して特攻攻撃を敢行した。伏竜特別攻撃隊は単身潜水し水中から攻撃する特攻隊でこの地で訓練に励んだ。

今日焼土から蘇生した日本の復興と平和の姿を見るとき、これひとえに卿（けいら）等殉国の英霊の加護によるものと我等は景仰する。ここに戦跡地コレヒドールと沖縄の石を併せて、ゆかりのこの地に特攻殉国の碑を建立し遠く南海の果に若き生命を惜しみなく捧げられた卿等の崇高なる遺業をとこしえに顕彰する。

昭和四十二年五月二十七日　有志一同・元隊員一同』

（※阿川弘之氏が加筆）

（３）関連残存遺跡

大規模だった訓練所関連施設のうち、現在残存するのは、起重機の基礎台と烹炊所（給食所）用とその他用の防空壕及び対空陣地跡など、ごく僅かであります。

①起重機の基礎台

本部前の海面部にコンクリート築造物が一カ所だけ見えます。このコンクリート築造物（基礎台）は当時、起重機（クレーン）が設置されて、資材や震洋艇などの揚げ降ろしに利用されていました。大きさは東西4.0m、南北4.5m、満潮時海面からの高さ0.5mあります。木製の桟橋で海岸に連接していました。

②烹炊所の防空壕

特攻殉国の碑の東側約200m、水田の南側、丘の北側崖下にあります。全面コンクリート張り、壕口の高さ2.6m、幅2.8m、奥行10.3m。

この他、この壕の東（向かって左）側に未完成粗掘りの防空壕が３本残っています。この田圃一帯に訓練所関係の烹炊所がありました。

（４）慰霊祭

毎年５月の第２日曜日14時から開催され、2003年度からは地元の新谷郷自治会が主催しています。

英霊の刻銘数は2011年５月現在3511柱、訓練の初期は魚雷艇要員を養成しましたが、1944年（昭和19年）９月頃からは特攻隊としての、震洋艇要員の養成が主で、回天・伏竜・蛟竜などの要員も訓練しました。

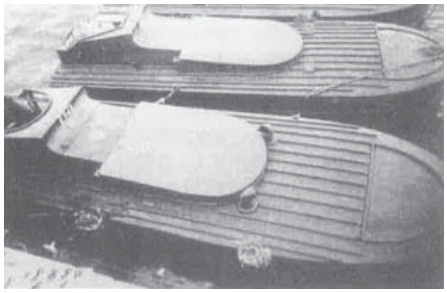
刻銘数の内訳（震洋艇隊2523、魚雷艇隊783、回天隊24、伏龍隊・蛟龍隊など181）

（５）震洋艇（通称マルヨン艇）　～ベニヤ板製でエンジンは自動車用67馬力を転用～

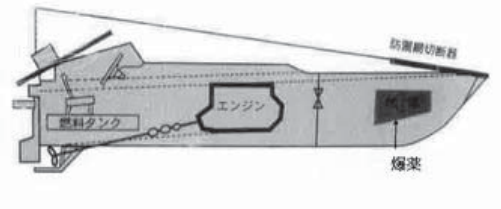
重さ250kgの爆薬を艇首に装着し、乗組員とともに敵艦に激突し自爆する特別攻撃隊。全国で約6,179基（隻）を製造、前線および国内の主要地に配備されました。（28ﾉｯﾄ×1.852⇒時速52km）

震洋艇は舟としての隻ではなく、武器の一種としての基で数えられました。

マルヨンは当時検討された特攻兵器の形式番号で４番目の略号。川棚の海軍工廠でも製作されました。



１人乗りの震洋艇１型、試作時の名称は「マルヨン艇」



型	乗員	エンジン	長さ	幅	速さ	兵装
1	１人	１台	5.1m	1.6m	28ﾉｯﾄ	ロケ２基
5	２人	２台	6.5m	1.8m	32ﾉｯﾄ	同＋13㎜

（6）魚雷艇（乙１型）

速力38.5ノット（時速約70㎞）、乗員８～９名、長さ18m、排水量20トン。魚雷を積載し、敵の艦船に向けて発射し攻撃した。約300隻製造。

５．対空陣地跡

百津郷一帯の川棚海軍工廠、三越郷片島の魚雷発射試験場、新谷郷と小串郷の魚雷艇訓練所などの軍事施設を敵飛行機から防衛するための関連陣地群がありました。

（1）三越砲台

川棚地区砲台の本部は大崎入口バス停の東側の信号機から、細い道を南方へ約150m付近にありました。地籍図では白石郷の区域になります。

1943年（昭和18年）４月に新設され、常時駐留は準士官１、兵曹６、兵隊33で合計40名でした。装備は12.7㎝連架高角砲２門、13㎜機関砲２基。平屋建ての兵舎があり、敗戦後暫くの期間は小串小学校の仮校舎として使用されました。現在は台座も兵舎も残っていません。

（2）探照灯陣地

琴平宮（ことひらぐう）の北側、国道から約300m付近にありました。直径５m、円形のコンクリート基礎台が残っています。

関連設備として、弾薬庫・防空壕・水槽などの跡が近くに残っています。

（3）新谷砲台

新谷郷の西部、小字「さがり」の丘の頂上部にありました。装備は13㎜連装機関砲。基礎コンクリート部分が残っています。

（4）川棚砲台

百津郷の小字鍛冶ノ平（かじのひら）旧東彼杵郡建築学校跡・現在は剣道練習場の丘の西側に８㎝高角砲が２門、常時駐留は15名でした。基礎コンクリート部分や防空壕が残っています。

（5）川棚砲台の弾薬庫跡

百津配水池の北東側約100mの山中にあります。コンクリート壁の厚さが0.4m以上で頑丈な構造です。三越砲台にも類似構造の弾薬庫跡があります。

（6）川棚川砲台

川棚川の河口西岸にコンクリート製の円形基礎台が残っています。建設途中で敗戦になったのでしょうか。地元の古老は砲台跡と呼びます。

海岸からの距離約11.0m・基礎台部の外径4.3m・内径2.9m・厚さ0.7m・高さ1.0mあります。

６．その他の戦時遺跡

（１）川棚変電所の大型防空壕　～小音琴郷の下大迫（しもおおさこ）にあります～

高圧送電線で、６万ボルトを受電し、６千ボルトに下げて、町内の各所に配電しています。電力に関しては川棚町内での心臓部の働きをしています。

戦時中は敵飛行機からの空襲被害を避けるために、この大型の防空壕に変圧機器を収納してありました。なお高圧送電線の柱は木材丸太でした。

（２）水道設備

戦時中の川棚海軍工廠とその関連施設のために上水道の設備が進められました。それらのうち、現在も川棚町の水道施設として実用されているのがあります。また針尾海兵団（現在のハウステンボス）への送水設備もありました。

①山道浄水場、②配水池

沈澱池・百津配水池・尾山配水池・白石高部配水池などでは戦時中の施設も現用されています。

（３）鉄道トンネルの跡

百津郷のシメノキから岩立に通じる鉄道トンネルが掘られましたが、線路を敷く前に敗戦で工事は中断しました。戦後は通勤通学など歩行者用として利用されていましたが、危険事故防止のため現在は出入り口を閉鎖しています。

（４）海軍共済病院の跡

海軍の諸施設のうち、医療関連施設では、下組郷の水田地帯6.5haを埋め立てて、1944年（昭和19年）７月に開設された「海軍共済病院」の跡があります。川棚空襲や長崎原爆の際には、ここに多くの被爆者を受け入れて治療に当たりました。この病院は戦後「国立病院川棚療養所」となり、現在は「独立行政法人国立病院機構長崎川棚医療センター」となっています。この共済病院跡の裏（北側）には防空壕が掘られており、ここも川棚空襲や長崎原爆の負傷者の治療に利用されました。

おわりに

戦時遺跡も近代化遺産・戦跡考古学として近年全国的に見直されるようになりました。

戦争体験者が少なくなりつつある今、戦争の実態を次の世代に伝えながら世界平和を願いたいと思います。

（協力：川棚史談会　松崎賢治）